2015.5.31　三位一体の主日

# 三位一体の神

マタイによる福音　28:16-20

（そのとき、）十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

説教

神はこの世をよきものとして造られました。でもアダムは罪を犯し、ゆえにアダムとエバは楽園から追放され、男は食べるものを得るために苦しむものとなり、女は産むために苦しむものとなった。
モーセは神から掟を授かり律法として神の民に与えたが、民はその掟を守ることができなかった。掟を守ることで掟に背いてしまうという逆説に陥った。
イエスは神の子として世にやってきて、洗礼者ヨハネから洗礼を受け、水を聖い水とした。そして古いものに死んで新しいものになる手本を示されたイエスは教えを説いたが人は聞く耳を持たず、イエスを十字架につけた。弟子たちも最期までイエスに従うことができずに世に負けてイエスを置き去りにした。しかし、イエスは死に勝利して復活した。
きょうの第一朗読ではモーセが掟（十戒）を与える、それを守るれば、「子孫も幸いを得、あなたの神、主がとこしえに与えられる土地で長く生きる」と約束しています。しかし民は掟を守ることができませんでした。イエスは「神を愛し、隣人を愛せ」と掟を新しくしました。しかし民はそれも受け入

れず、イエスを殺しました。人類は暗黒の世界からの救い＝イエスを拒絶しました。しかしイエスは死に打ち勝ち復活し、世に聖霊を送り、信じる民の群れ（教会）を生み出しました。
きょうの福音は大宣教命令と呼ばれています。この命令を単純にただ「いけいけドンドン」としてしまった歴史を反省する必要が現代に生きるわたしたちにはあります。イエスがガリラヤの山で弟子たちに伝えたこと、
１）すべての民を弟子にする
２）父と子と聖霊の名によって洗礼を授けること
３）命じておいたことをすべて守ること
これらの命令は長い年月の中で変形し、ゆがんでしまいました。そのことを真摯に反省することがわたしたちには必要です。
さて、きょうは三位一体の主日です。わたしはプロテスタントの神学校にいって学びましたが、どこの神学校でも三位一体を積極的に教える学校はありませんでした。三位一体は奥義です、とか神聖なので説明できませんといって終わります。だから教えてもらったことをお伝えすることができません、学んだことというよりわたしの今の実感をお伝えします。
三位一体とはきょうの福音テキストにあるように洗礼のことでもあり、毎週の主日におこなう聖餐のことです。イエスが教えてくれた制定のことばによってパンとぶどう酒が聖なるもの、イエス･キリストの体と血になり、それをわたしたちがいただく、そのことが三位一体の神を信じること、信じてて礼拝するということです。
パンを拝領する時、ぶどう酒を口に含む時、そのときにめいめいが感じることが三位一体の神です。「ことばは神となった」聖書がいう「ことば」とはイエス･キリストです。福音はイエスのことばですが、その解説である説教は牧師のあくまで人間のことばであって聖書のさす「ことば＝キリスト」ではありません。説教（ことば）で神を知るという経験もあるかもしれません

が、たいていただのお説教です。それもながったらしい説教です。わたしにとって礼拝で大切なことはイエスさまの「からだと血」にあずかること、この礼典行為、カトリックでは秘跡、オーソドックス（正教会）では機密といっています、これこそが人のことばを超越して三位一体をさとらせる重要なことだと感じています。

神学校の授業項目に礼拝学というものがあります。礼拝についての理論や実践を教える授業です。理論はとうぜん神学となってややこしいのですが、神学というよりは宗教学アプローチの授業を受けたことがあります。日本でおこなわれている礼拝をミシュランの調査員のように覆面で、ようはこっそり、チェックシートを携帯して評価するというものでした。プロテスタント教会を中心に調査しているので聖餐についてのリサーチは少ないのですが（プロテスタントは聖餐を月に一回しか実施しないところが多い）聖餐のときに配されるコップが汚いとい評価があったのにはびっくりしました。日本のプロテスタント礼拝ではぶどう酒を供されるところはほとんどなく、ぶどう味のジュースが各個人に小さなコップで渡されます。係りの人が洗っているのでしょうが中には汚いのもあるのでしょう。

そんなことをレポートして一冊のテキストにまとめてありますが、講師は余談として一杯の水のはなしをしていました。いつもは礼拝開始３０分前には会堂入りするのだけれど到着がぎりぎりになってしまった。また、急いでいたのでとてもノドが渇いていたので水をくださいといったところ、とてもきれいなコップで冷たいおいしい水をいただいた。彼はとてもうれしかったというエピソードです。人情話としてもいい出来のはなしですが、わたしは聖霊、三位一体の喩え話としても上出来な話だとおもいます。